

ひたちなか 埋文だより 35



三反田蜆塚貝塚の土製腕輪

1999年の発掘調査で袋詰めされたままになっていた三反田蜆塚貝塚の貝層サンプルを水洗してみると、中から土製腕輪が見つかりました。40mm余りの破片ですが、全体の形状は倒卵形、つまり一方が尖るような楕円形が推定されることから、オオツタノハ製の貝輪を真似たものなのでしょう。縄文時代のオオツタノハ製貝輪そのものは、市内の上の内貝塚と御船蔵貝塚から出土しています。

(2011.8.24 撮影)

CONTENTS	ふるさと考古学 ～遺跡と人のワークショップ～ 2006 - 2010	
	「出会い、別れ、そして夢考古学の旅路」 第7回 茨城県史編纂でお会いした方々と遺跡 (川崎純徳)	
	展示資料紹介 原の寺瓦窯跡・奥山瓦窯跡出土の須恵器 (佐々木義則)	
	横穴墓を歩く⑥ 尾形山横穴墓群(瓦吹 堅)	1ケース・ミュージアム 21 出土した古代の食べものたち
	1ケース・ミュージアム 20 平成22年市内遺跡発掘調査速報展	
	ひたちなか市の遺跡⑧ 佐野中学区編	歴史の小窓⑦ 古代の万能具一刀子
虎塚古墳花便り⑦ アジサイ		ほか

2006 - 2010

ふるさと考古学

～遺跡と人のワークショップ～

ひたちなか市には、豊かな自然とたくさんの遺跡があります。また、遺跡からは土器や石器などのいろいろなモノが出土しています。2006年度からスタートした「ふるさと考古学」は、それらの遺跡やモノを通して、私たちの祖先の生活と文化を学ぶ講座です。2010年度までの5年間で、59回の講座を開催し、土器や石器、ガラス玉、壁画づくりなどの様々な体験をしてきました。それはまさに、私たちの祖先とふれ合う楽しい時間です。

糸



カラムシという植物から糸をとって、縄文ポーチを編み上げます。



青木光恵氏



綿引逸雄氏



土器



宮本ルリ子氏



本物の土器をよーく観察して、縄文土器を作ります。最後は野焼きをして、完成させます。

食



ドングリを使えば、縄文クッキーができてあがり。

壁画



堀江武史氏



石の表面に白色粘土を塗って、その上にベンガラという古代の赤色の絵の具を使って、文様を描きます。最後にみんなで組み合わせると、虎塚古墳の石室が完成です。

2010年度までの「ふるさと考古学」は、文化庁地域文化振興事業「伝統文化こども教室」に採択され、その趣旨に基づき実施してきました。2011年度からは、ひたちなか市の事業として公社に委託され、講座を行っております。



篠原祐一 氏



柴田 徹 氏



石

石のやりやヤジリ、古墳時代のお祭の道具、標本など、いろいろなものを作ります。



大竹幸恵 氏



橋本勝男 氏



小宮将夫 氏



渡邊浩幸 氏



はし 箸

お箸も作ったよ。



座長 さかいひろこ 氏



ガラス



貝



骨



勝田友李 氏

弥生時代のガラス玉作りに挑戦。



藤本 武 氏



忍澤成視 氏

貝を集めて、プレスレットや標本を作ります。



遺跡から出土した本物の人骨や動物の骨を研究します。



谷畑美帆 氏



小宮 孟 氏

講座の受講生は、小学4年生から中学生を対象としています。2010年度までの受講生の参加者数は、2006年度が22人、2007年度が18人、2008年度が17人、2009年度が37人、2010年度が26人の合計120人となります。

かご
籠



虎塚古墳の森から
採ってきた植物のツルで、こんなすてきな
籠が作れます。



谷川菜子 氏



木



フィールド
探検



わら
藁

わらから縄を
作ります。



神上裕介 氏



磯部保衛 氏

火おこしや石斧にチャレ
ンジ。



矢野徳也 氏



身近な遺跡や自然を観察しながら
歩いて探検します。

歴史の小窓 その七

古代 万能具―刀子

ひたちなか市武田遺跡群から出土した鉄製品は、その多くが刀子と鏃^{どうす}で占められています。古代、鉄は貴重品だったので、一般の人々は多種類の鉄の道具を持つことはできませんでした。

写真は、武田西端遺跡六七号住居跡の床から出土した七世紀の刀子です。珍しいことに、木でできた柄^{つか}の一部が残っています。先端が若干欠けていますが、刃の長さは九センチほどの小刀です。古代の住居跡からは、私たちが使っているような包丁は出土しないため、こうした刀子を包丁代わりに使っていたと考えられます。



アイヌの民具に、マキリという小刀があります。木を彫り、皮を剥ぎ、炊事にも使う万能の道具です。日常的に男女とも携帯して用いるもので、女性のマキリは護身用でもあったようです。アイヌのマキリは、古代の刀子の使い方を考える上で、とても参考になります。この万能具である刀子をたいせつに使いこなす古代の人々の姿が浮かんでくるようです。(佐々木義則)

参考文献 萱野茂一九七八『アイヌの民具』すずさわ書店／村木美幸二〇〇四「暮らしのかたち」『別冊太陽 先住民アイヌ民族』平凡社



展示のようす



この展示では、いまから一五〇〇〜一二〇〇年ごろにあたる、古墳時代後期から奈良・平安時代の竪穴住居跡から出土した、焼けて炭になった種（炭化種実^{たんかしゆじつ}）といます。）をもとに当時の食生活を想像してみました。展示した炭化種実^{たんかしゆじつ}は、竪穴住居跡のカマドの中の灰を水洗いして探し出したものです。それでは、ちょっと、当時の村の食べものを想像してみました。

水田の近くに人々が暮らす村ができました。水田ではイネが育ち、そこでできた米が主食になりました。ただし現代のように広い田んぼからたくさんのお米がとれるわけではありませんから、その足りない分をおぎなうために、粟^{はちふね}では、オオムギ・アワ・キビ・ヒエといったいわゆる「雑穀^{ざっく}」がたくさん作られて、米とともに食べられています。また大豆やササゲといったマメ類も穀物と同じように長期の保存が可能であったので、人々の暮らしに欠かせない食料でした。

オオムギ

堅穴住居のそばには小さな畠があつて、そこではカボチャ・マクワウリといった野菜もつくられ、旬しゅんの野菜が食卓にならびました。村のなかの、ちよつと草の生えたところでは、シソ・サンショウ・エゴマの葉や実もとることができたので、香辛料こうしんりょうとして味付けに工夫くわえられることもありました。

村のなかにはくだものなる木も植



古代の村のようす（奈良時代ごろを想定）
 ([鬼頭清明 1985『古代の村』岩波書店] の図を
 トレース、一部改変)

えてあつて、ウメ・モモ・カキ・クワの実がとれました。秋には林でヤマブドウやエビズルといったぶどうの仲間をとることができましたし、沼に行くときヒシの実もとれました。きつと村の子供たちは、甘い果物やスタジイ・カヤといった木の実などをたくさん食べることができ、秋がくるのを、とても楽しみにしていたことでしょう。

村がおおきくなつてくるとまわりの林はきられて日光のあたる場所が増えてきました。すると、太陽の光が大好きなクリの木が、集落の付近でたくさん育つことができるようになります。クリは秋に多くの実をつけます。クリの実

は乾燥させれば長期の保存もできたため、古代の村にとってクリは穀物と同じくらい大切な食べ物だったことでしょう。

（佐々木義則）



ひたちなか市域には、合計約三六〇ヶ所にのぼる遺跡が確認されておりあります。この中には、埴輪づくりのムラである馬渡埴輪製作遺跡や装飾壁画で有名な虎塚古墳といった国指定の遺跡もあります。しかし、これらの遺跡の中には、開発行為に伴い、やむを得ぬ理由で失われていく遺跡もあります。そういった遺跡に対して、ひたちなか市では発掘調査を実施し、記録として遺跡を残す事業を行っております。その事業のひとつが「市内遺跡発掘調査」です。

平成二二年の市内遺跡発掘調査は、七遺跡で実施しました。その調査によって、住居跡一五基を確認し、そこからは古墳時代や古代の土器が出土しています。今回の展示では、住居跡の調査を実施した本郷東遺跡と高野富士山遺跡から出土した遺物の一部を速報として紹介しました。

本郷東遺跡では、一辺が約七・二mと推測さ



展示のようす

れる大型の住居跡から、甕や甑・杯などが出土しました。注目される遺物は須恵器の甕で、住居内からはほぼ完形で出土することは非常に希なことです。

高野富士山遺跡の住居跡からは、須恵器杯や土師器甕・有台杯などがあり、その中の杯の1つには、外面に墨で文字が書かれた墨書土器がありました。三文字書かれているように見えますが、判読はできていません。（稲田健二）



山口舞夏さんの
虎塚ぬりえ
(2011.8.4)



茨城県北茨城市
尾形山横穴墓群 - 夢窓窟 -

瓦吹 堅

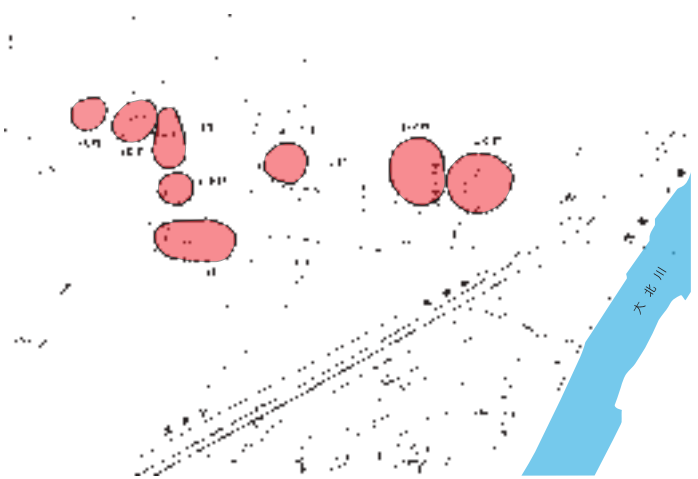
(茨城キリスト教大学)

常磐線磯原駅のすぐ北に迫る崖面に横穴がた
くさん見られる。この横穴群は尾形山横穴群と
呼ばれ、幅四〇〇mほどの範囲に八群七二基を数
えることが出来る。

一〇〜一五mの凝灰岩の岩肌には、二段あるい
は三段に横穴が作られ、今ではほとんどが開口し、
戦時中は防空壕として利用されたという。それ
ぞれ支群の横穴数には違いがあるが、宅地造成
で崖が崩されたりして消滅したものもある。横穴
数が多い支群では、大型の横穴を中心に、左右
に広がりを見せて構築されている。

現在、北茨城市内には八か所の横穴群が周知
されているが、ほとんどが海岸線に沿って分布を
見せている。

尾形山横穴群は、大正二年、小松眞一によつ
て初めて紹介されている(『常陸多賀郡の一横穴』
『人類学会雑誌』三七―一二)。この報告の中でも
とも注目された横穴が夢窓窟である。夢窓窟は



横穴墓の位置(丸囲み部分)

南北朝時代の臨済宗の禅僧夢窓疎石が磐城から
鎌倉に戻る途中、地元の比佐居士に招かれ、嘉
元三(一二三〇)年二月から十月の間、弟子達と
ともに修行したといわれている(『夢窓正覺心宗
普濟國師年譜』)。

夢窓窟はG支群(一五基)の中央に位置し、玄
室の長さ五・一m、奥壁幅二・八m、玄室の高さ二
mの大型の横穴で、奥壁寄りに高さ二〇cmほどの
棺座をもつ家形の構造を示し、市の史跡として指
定されている。

平成四年、駅西開発に伴って、D支群(八基)
の発掘調査が実施された。すでに開口していたた

め出土遺物はほとんど見られなかった。形状は、
後世の削平等も見られたが、ドーム形が主体の
支群である。

尾形山横穴群のどの横穴からかは特定できな
いが、銅鏡蓋・珠文鏡、勾玉などの装身具、直刀
や鉄鏃などの武具類も出土しており、市の文化
財に指定されている。

これら横穴群の被葬者については不明なところ
が多いが、いわき市内の横穴群との出土遺物の共
通点も認められる。

当横穴群の北約一kmには二ツ島横穴群があり、
さらに北の天津町には、松村瞭によって調査され
た唐帰山横穴群が位置する(『常陸国多賀郡天津
の横穴』『東京人類学会雑誌』二二―二三七)。



夢窓窟の写真



高野寺畑遺跡の古墳時代後期のⅠ-1号住居跡からは、たくさんの土器が出土しました。

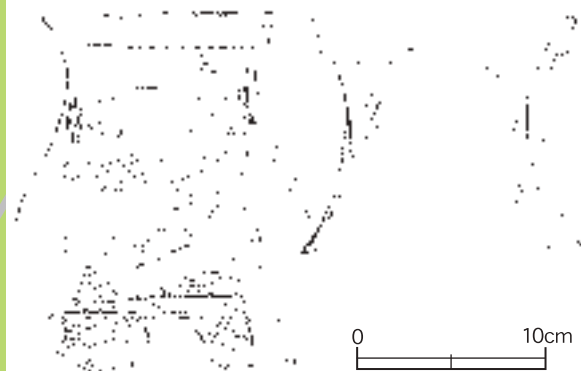


青龍寺は霊松山昭秀院と号し、1497（明応6）年に開山し、江戸時代末期までの約350年間続いたお寺です。高野地区に残る絵図には、本堂、仏堂、庫裡、山門、心寺の池などが描かれています。調査では、池の跡から石製の台座などが出土しています。

約800年前

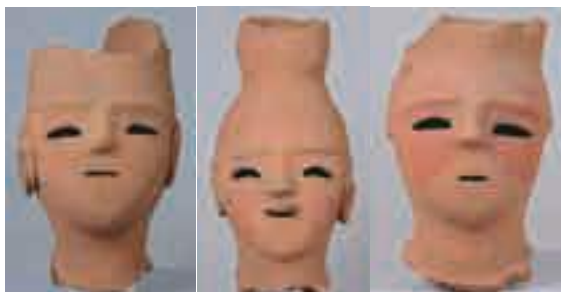
平安時代

0 1 km



0 10cm

高野寺畑遺跡から出土した弥生時代後期の土器には、顔付きの異なる3つの土器が見られます。3本の線で文様を描く「東中根式土器」の系統、10本など多数の線で文様を描く県南部域の土器の系統、縄文の上に1本の太い線で文様を描く東北地方の「天王山式土器」の系統、これらが複合しているのです。



鉾ノ宮古墳群は、第1号墳が全長約32mの前方後円墳で、第2号墳が直径約14mの円墳です。埋葬施設は第1号墳が箱形石棺で、中からは人骨とともに鉄鏃や大刀、刀子が出土しました。第2号墳は木棺と思われます。第2号墳の周溝からは、馬形埴輪や人物埴輪、円筒埴輪が多く出土しました。人物埴輪の表情は豊かで、現在も古代の笑みをたたえています。これらの埴輪の製作地はどこか。これを探るために、ユニークな試みを行いました。それは警視庁の協力を得て、埴輪に残る工人の指紋を調べたのです。その結果、古墳で出土した埴輪の指紋と馬渡埴輪製作遺跡で出土した埴輪の指紋が一致しました。鉾ノ宮古墳群は、埴輪に残された指紋によって製作地を特定できた日本で最初の遺跡なのです。

佐野中学区には、現在、29の遺跡がみつかっています。この中には、縄文時代の小貫山遺跡、弥生時代の高野寺畑遺跡、古墳時代の鉾ノ宮古墳群や老ノ塚古墳群、孫目古墳群、中世の青龍寺跡があります。これらの遺跡の多くが、新川流域に存在しています。

遺跡の発掘調査は、2010年までに24回実施されています。2003年の小貫山遺跡の調査では、縄文時代の前期の土器が出土しています。1977年の高野寺畑遺跡の調査では、弥生時代後期や古墳時代後期、古代の住居跡が調査され、古墳時代の住居跡からはたくさんの土器が出土しました。1966年には鉾ノ宮古墳群で前方後円墳1基と円墳1基が調査され、人骨や大刀、人物や馬形の埴輪が出土しました。青龍寺跡は室町時代に開山されたお寺の跡で、1985年の調査によって建物や池の跡がみつかっています。

2010年までに発掘調査された住居跡の数
79基

2010年までに発掘調査された遺跡（地図上の●印）

高野小地区：鉾ノ宮古墳群、下高場遺跡、東原遺跡、高野富士山遺跡、神田遺跡、小貫山遺跡、高野寺畑遺跡、宮下遺跡
佐野小地区：老ノ塚古墳群、佐和中宿遺跡、孫目A遺跡、孫目古墳群、老ノ塚遺跡、高場遺跡

ひたちなか市の遺跡8（佐野中学区）



孫目古墳群の第1号墳は、1998～99年に発掘調査が実施されました。古墳は直径6mの円墳で、埋葬施設は凝灰質泥岩で構築された横穴式石室です。残念ながら盗掘により副葬品は見つかりませんでした。



鉾ノ宮古墳群第2号墳から出土した馬形埴輪

約 12000 年前

約 2200 年前

約 1800 年前

約 1300 年前

旧石器時代

縄文時代

弥生時代

古墳時代

奈良・

歴史館での会合の後、例のごとく喫茶店で話をした。昭和五一年であったと思われるが定かではない。その時、頭痛があり帰ったら医者にかかると言う。それが県史参加の最後となった。その年の秋ごろ、佐藤達夫先生から病院に来てほしいとの連絡が入った。川上氏とお見舞いをかねて東京・立川の病院にお訪ねした。その時『後野遺跡』の報告書を持参した。先生はページを繰りながら、何かをつぶやかれたが聞き取れなかった。そしてベッドを降りられ私の手を握り締めて「県史のことはよろしく」と後事を託された。病院を辞す時にはドア外まで来られ再度「県史をよろしく」と言われた。佐藤先生の県史に対する思いがにじみ出ていた。そして昭和五二年四月、幽明境を異にされたのである。山内先生が昭和四五年に、滝田先生が四九年に、佐藤先生が五二年と相次いで亡くなられた。惜しみても余りある三先生のご逝去であった。

四月の考古部会の会議で斎藤部会長から引き継ぎを指示され、四月の下旬に歴史館副館長をされていた成瀬孟男氏が来校され、「先土器・縄文時代編」の編集を要請された。歴史館でも全面的に協力すると言う。しかし、今までのいきさつから協力は得られない事は分かっている。だから、辞退した。しかし校長も交えて説得され引き受けざるを得なくなった。原稿の執筆、図版・写真を整える。実測図のトレースもある。図面のサイズを統一しなければならない。これ

出会い、別れ、そして夢考古学の旅路

第7回 茨城県史編纂でお会いした方々と遺跡



1975（昭和 50）年に後野遺跡を訪れた佐藤達夫先生
左は佐藤次男氏、右が川崎



らを一人でやる。トレースの一部を藤崎芳樹氏に手伝ってもらいようやく入稿にこぎつけた。

県史編纂では多くの研究者にお会いする機会に恵まれた。資料採集は基本的には単独で、良い資料があると聞けば飛んで行つた。情報の多くは郷土史家からのものが多かった。お世話になった方々には鹿嶋市の飯田平左衛門氏、海老原幸氏、行方市の小仁所左門氏、堤乙音氏、土浦市（新治村）の酒井栄氏、北茨城市の上神谷忠典氏、日立市（十王町）の橋本満氏、かすみがうら市（出島村）の服部保氏、筑西市（下館市）の長岡芳氏等がいた。水戸市では大塚子之吉氏宅を訪ねて資料を見せていただいた。お世話になったこれらの方々は、すでに鬼籍に入られてしまっている。

こうした方々の紹介で小学校や中学校の所蔵資料も調査した。遺跡の見学に同行していただいたり、所蔵資料の実測や写真撮影をさせていただいたりした。懐かし遺跡や古墳は枚挙にいとまがないほどである。主なものをあげると小美玉市の野中貝塚や部室貝塚、南坪貝塚、茨城町栗山古墳、出島村の男神貝塚、安食平貝塚、岩坪貝塚、柏崎瓦窯跡、行方市の若海貝塚、井上貝塚、鬼越貝塚、於下貝塚、藤井貝塚などがある。

先土器・縄文時代編の編集が始まったころ下館市の長岡氏宅を訪ねたことがある。川上博義

氏から下館の長岡氏が膨大な資料を所蔵しているから一度見に行こうと誘われて、お邪魔した。筆者が小学校・中学校時代に下館に住んでいたこともあったが、下館周辺の遺跡としては女方遺跡や船玉古墳くらいしか頭になかった。船玉古墳は中学生のころ何回か石室内に入ったことがあるので記憶に残っている。

長岡氏を下館のお宅に訪ねて、何回かお会いしてお話をうかがった。また、桜川市（真壁町）熊の宮遺跡や筑西市（下館市）外塚遺跡の調査に同行した。真壁町では最初に北椎尾天神塚古墳の副葬品の鑑定を頼まれた。三角板皮綴の衝角付甕であった。石岡市で東大橋原遺跡の調査中に電話があり、「発掘の仕方を教えてほしい」と言う。東大橋原遺跡の調査に誘うと来られて、二、三日参加され「発掘についてはだいたい分かった」と言って帰られた。翌年、真壁町の熊の宮遺跡を発掘するという連絡を受けた。調査中にもよく電話があり、「分からなくなったから見に来てほしい」と言われ、何回か現地にでかけた。報告書の執筆中に病気を患い、志半ばで逝去された。長岡氏の電光石火の行動力には驚かされるものがあるが、当時の研究者の多くに共通した研究者魂とでもいうのであろうか。「遺物には足はない。人間の方から近づくのだ」。長岡氏が当時情熱を傾けていたのが『真壁町史』であり、筆者がその仕事を継承した。

川上博義氏とは主に大学の研究室での資料

実見が多かった。合同では北茨城市内遺物調査、日立市郷土博物館等の所蔵資料の調査を行ったが、当時は公共施設内ではほとんど考古資料は充実していなかった。川上氏とは慶応義塾大学に清水潤三先生、江坂輝弥先生、早稲田大学に西村正衛先生、東京国立博物館には女方遺跡の整理中の野口義麿先生や磯崎正彦先生を訪ね、整理中の資料について案内して頂いたが、お二方とも整理途中で他界された。慶応義塾大学では野中貝塚、早稲田大学では狭間貝塚、浮島貝ヶ窪貝塚、向山貝塚等の資料を見せていただいた。しばらくして野中貝塚を訪れたが感激ひとしおであった。佐藤次男氏とはほとんど出かけることはなかったが県立土浦第三高校に所蔵されていた真鍋遺跡の資料調査にご一緒に実測などをおこなった。五領式の良好な資料であったのを思い出す。しかし、なぜか『茨城県史考古資料編 古墳時代』には掲載されなかった。県史編纂はその後通史編纂に移行し、事実上その任務を閉じたのである。

若くして県史編纂に携わることができ、斎藤忠、大塚初重、佐藤達夫、川上博義の各先生とご一緒でき、さらに多くの県内外の研究者と知り合えたことは人生にとっても大きな収穫であり、改めて考古学研究、埋蔵文化財の保護に指針を得たように感じている。

*川崎純徳氏のプロフィールは、連載第一回『埋文だより』第二十九号に掲載してあります。

十五郎穴の昔話 その三

十五郎穴では、昭和に入ると横穴墓の測量などの調査が実施されるようになります。埴田比古は、一九四〇（昭和一五）年三月二日の県指定史跡の認定に際し、館出支群の横穴墓の配置図や主要横穴墓の測量を実施しています。その調査により、当横穴墓群を「県下希にみる横穴群」とし、また、多くの横穴墓の密集と「個々の横穴が比較的に既往の破壊を免れて」いることを評価し、指定の理由としています。

一九四二（昭和一七）年には、石田周作が横穴墓の測量調査を実施し、その著書『古墳研究』に約五〇頁もの論考を掲載しています。その中には、当時の館出支群の貴重な写真も掲載されています。

このように十五郎穴は、江戸時代から文献に登場し、調査も昭和の初期から行われてきた貴重な遺跡です。そして現在は、十五郎穴全体の測量調査が行われ、さらに館出支群においては約六十年ぶりに発掘調査も実施されます。これらの調査成果を踏まえて、十五郎穴の国指定史跡の認定を目指します。

（稲田健二）



『古墳研究』に掲載された十五郎穴横穴墓群

はらのてらがようあと おくやまがようあと

原の寺瓦窯跡・奥山瓦窯跡出土の須恵器

佐々木 義則



原の寺瓦窯跡第1次調査の様子（1976年）

古代の瓦窯であるひたちなか市原の寺瓦窯跡は実態が不明な部分も多く、資料の再整理が課題となっています。今回は、出土した須恵器を再整理することによって、瓦生産工房の時期が8世紀前半から中葉であることを確認しました。また須恵器の胎土観察からは、瓦窯跡周辺で須恵器生産も行なわれていた可能性が明らかとなりました。



図1 瓦窯跡の位置

1 はじめに

ひたちなか市足崎に所在する原の寺・奥山瓦窯跡は、新川から入り込む同一の谷に面して形成された奈良時代の瓦窯跡である。原の寺瓦窯跡は四次（一九七六・一九七九・一九九〇・一九九五年）、奥山瓦窯跡は一次（一九八八年）の調査が実施されている。各調査結果については報告書が刊行されているが、原の寺瓦窯跡については資料提示が一部にとどまるため、調査結果の実態が不明な部分も多い。今後、多量の出土瓦を中心とした出土資料の再整理・報告が実施されることが望まれる。本稿ではそうした作業に入るための足掛かりとして、まずは年代的指標として重要な須恵器供膳具を再整理し、各遺構の年代についておおよその目安を与えることを目的と

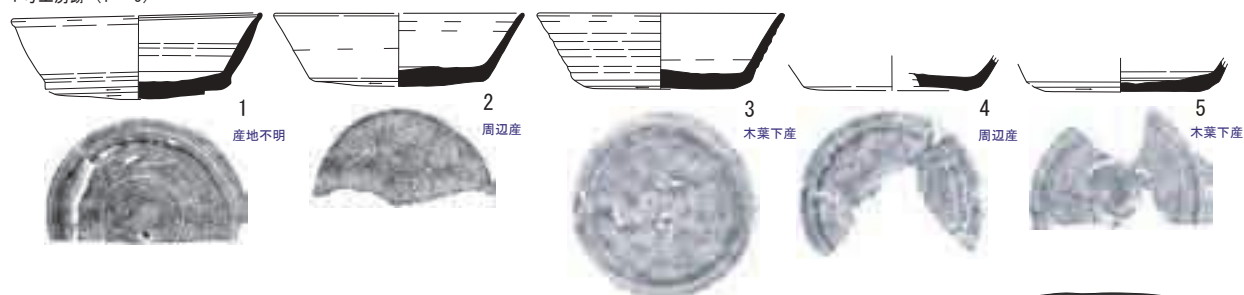
したい。

2 須恵器の年代

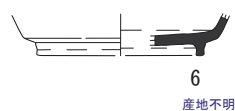
原の寺瓦窯跡の中で最も古い土器群は一号及び五号工房跡出土土器群である。丸底の杯を有することからみて八世紀第1四半期頃と思われるが、3・4・5が平底であることや18の鈕形などからみると、八世紀第1四半期後半頃の可能性が高い。その次は四号工房跡の土器群である。14・15・16は八世紀前半でも古相を呈するが、13の底径はやや小さいので八世紀第2四半期に下げた方がよいように思える。したがって八世紀第2四半期前半頃とみておく。次は二号及び六号工房跡出土土器群である。いずれも有台杯が認められるが、その高台の高さは低い。19の器高が低めであることも考慮すると八世紀

原の寺瓦窯跡 (杯：1・5・7・9・13・17・19・24・25・30 有台杯：6・10・11・26・27・31 蓋：14・15・18・21・23・28・29 有台盤：32

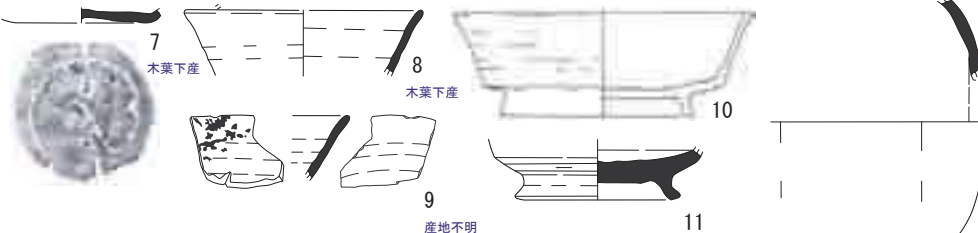
1号工房跡 (1～5) 横瓶：12 硯：16)



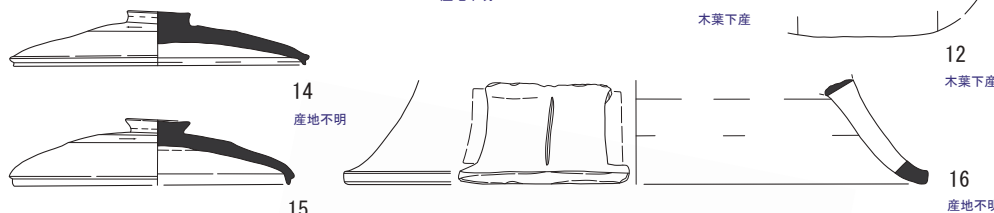
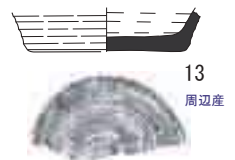
2号工房跡 (6)



3号工房跡 (7～12)



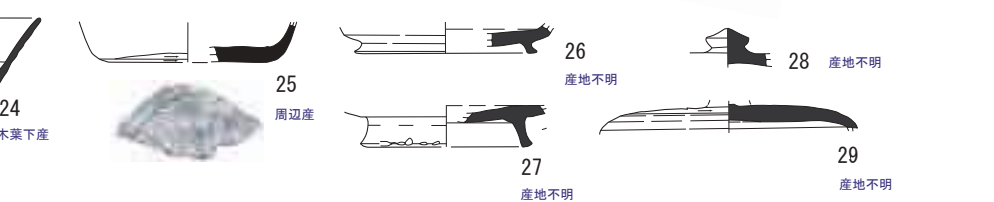
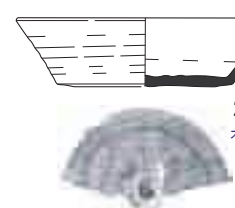
4号工房跡 (13～16)



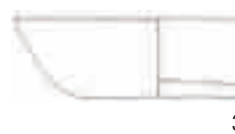
5号工房跡 (17・18)



表土 (24～29)



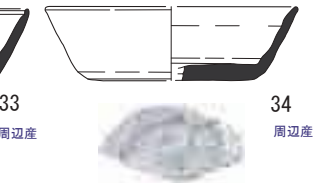
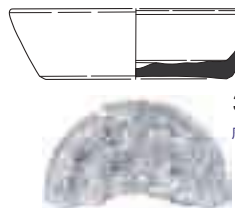
出土位置不明 (30～32)



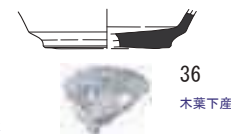
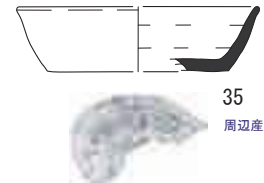
奥山瓦窯跡

(杯：33～36)

1号窯跡 (33・34)



表土 (35・36)



※断面白抜きの須恵器は、所在不明のため、報告書掲載の図を引用した。

0 10cm (1/4)

図2 原の寺瓦窯跡および奥山瓦窯跡から出土した須恵器

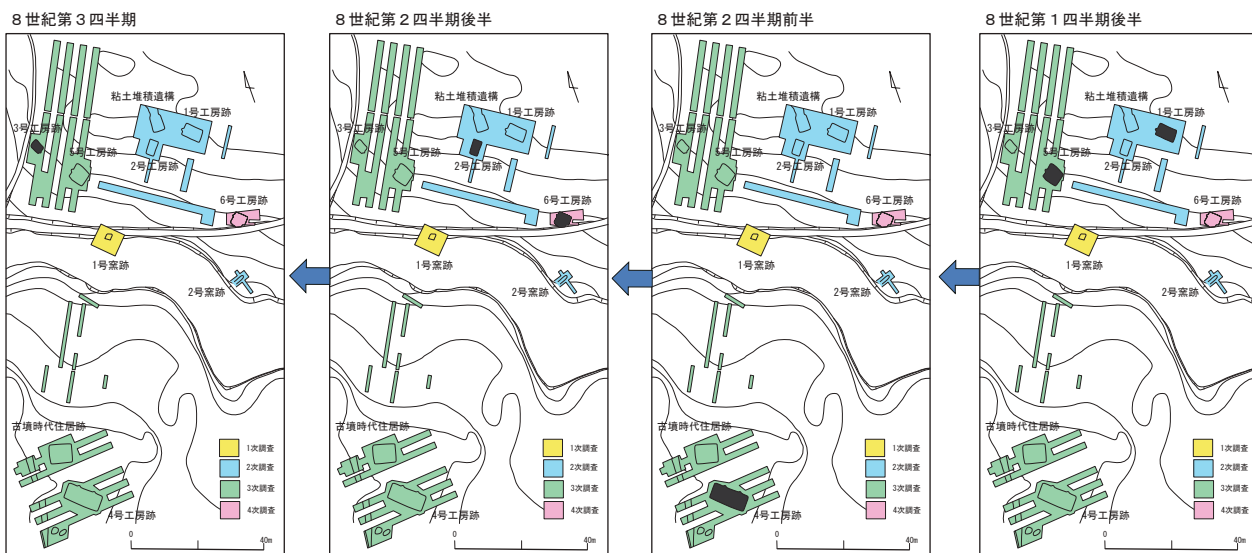


図3 原の寺瓦窯跡における工房の変遷（黒塗りが想定される遺構）

第2四半期後半頃とみるのがよいであろう。そして最も新しい土器群は三号工房跡出土土器群である。10の形状、7がヘラ切り未調整であることとその底径、8の形状などからみて、八世紀第3四半期に位置付くと思われる。以上のように、原の寺瓦窯跡出土須恵器の年代は、八世紀第1四半期後半から八世紀第3四半期頃と考えられる。よって須恵器の年代からみた原の寺瓦窯跡の工房の変遷は図三のように想定できるが、それは出土瓦からの検証を必要としよう。なお窯跡の年代的位置については出土瓦を検討しなければならぬので、今回は保留としておく。

ところで奥山瓦窯跡の須恵器であるが、一号窯跡および表土出土ともに八世紀第2四半期頃である。33の口唇部内面の沈線は古い要素であることから考えると、八世紀第2四半期でも前半頃だろうか。

3 瓦窯周辺に須恵器窯がある可能性

須恵器 2・4・13・14・15・19・20・21・

量のチャート片や海綿骨針を含むこと、といった特徴が指摘された。そして須恵器の胎土、特に14・15・19などは平瓦とほとんど同様の含有物であることがわかった。したがってそれら須恵器は、原の寺・奥山瓦窯跡の周辺で生産されたものである可能性が高いといえよう。周辺産と考えられる須恵器は、いずれも八世紀前半に位置付けられることからみて、瓦窯とともに須恵器窯も築かれて、生産にあたっていたことがわかる。ただし、ひたちなか市内の遺跡から出土する須恵器は、その多くが木葉下窯跡群産を主とすることからみて、原の寺瓦窯跡付近で焼かれた須恵器の生産量はそれほど多くなかったようである。

参考文献

『原の寺瓦窯跡発掘調査報告書』勝田市教育委員会一九八〇・一九八一／「奥山瓦窯跡」『昭和六三年度勝田市内遺跡発掘調査報告書』勝田市教育委員会一九八九／『原の寺瓦窯跡発掘調査報告書（第四次）』ひたちなか市教育委員会ほか一九九八／鴨志田篤二二〇〇三「茨城県原の寺瓦窯跡とその周辺」『新世紀の考古学』大塚初重先生喜寿記念論文集刊行会／鴨志田篤二二〇一〇「原の寺瓦窯跡、奥山遺跡」『茨城の考古学散歩』茨城県考古学協会



瓦窯周辺産と思われる須恵器蓋 15

文の々 埋センターの日 2011 前期

4月

一埋蔵文化財調査センター公開再開／西野国光氏寄贈資料受入【東中根遺跡土器】／二ワンケースミュージアム19「いただきます。」終了／13 高野小学校へ資料貸出【井上コレクション縄文土器ほか】／水戸市立上大野小学校へ資料貸出【井上コレクション縄文土器ほか】／19 上大野小学校より資料返却／22 那珂市立五台小学校6年生社会科見学



26 金上向山遺跡試掘調査開始／27 磯崎東古墳群発掘調査



27 高野小学校より資料返却

5月

8 第8回企画展「古代茨城の鉄生産」終了／二永井清氏寄贈資料受入【津田西山古墳群土師器・石棺石材】／12 上高津貝塚ふるさと歴史の広場企画展「土浦の遺跡16」より資料返却【武田遺跡群炭化種実】／13 中根小学校6年生社会科見学



14 ワンケースミュージアム20「平成22年 市内遺跡発掘調査速報展」開始／金上向山遺跡試掘調査終了

／26 文化財保護審議委員による震災被害調査【茨城県指定遺物東中根式土器】／27 那珂湊中学校へ資料貸出【井上コレクション縄文土器ほか】

6月

1 津田小学校6年生社会科見学／3 佐野小学校6年生社会科見学／7-9 飯塚前遺跡試掘調査／8 鉾田市旭小学校6年生社会科見学／14 那珂湊中学校より資料返却／14-16 敷地内放射線量測定



15 外野小学校3年生社会科見学／16-22 西中根遺跡試掘調査／24 佐倉市へ『佐倉市史 考古編』編纂のため資料貸出【武田遺跡群低石】／25 郷土歴史研究会／28 那珂湊第三小学校6年生社会科見学



29 上野修一氏・森嶋秀一氏（栃木県立博物館資料調査）三反田堀塚貝塚土偶

7月

2 堀原ふるさとを学ぶ会見学／小澤重雄氏（茨城県立歴史館）資料調査【猪谷津遺跡木製品】／3 ワンケースミュージアム20終了／5 那珂市立芳野

虎塚古墳 花便り

7 アジサイ

虎塚古墳の周辺がアジサイの名所であることを存じてすか。これらのアジサイは、平成一一年に市民の皆さんから持ち寄られたものです。

アジサイは、土壌の性質などによって花の色を様々に変化させます。つぼみのころは緑色、それが白く移り、咲くころには水色、または薄紅色。咲き終わりに近づくと、花色は濃くなっています。

名の由来は、「藍色が集まったもの」を意味する「あづさい（集真藍）」が訛ったものと言われます。また、漢字表記に用いられる

「紫陽花」は、唐の詩人白居易が別の花（フイラックか？）に名付けたもので、平安時代の学者源順がこの漢字をあてはめたことから誤って広まったと言われています。（稲田健一）



2010.6.24

小学校6年生社会科見学



15 茨城キリスト教大学博物館実習施設見学／17 ふるさと考古学
①「楽しい考古学」(講師・さかいひろこ氏)／22 三反田蜆塚遺跡本調査開始／23 ワンケースミュージアム21「出土した古代の食べものたち」開始／24 ふるさと考古学
②「土器の考古学」(講師・佐々木義則)／28 市内小中学校教師総合学習研修会(石鏝製作・火起こし)



28 中井泉氏(東京理科大学) 資料分析
【鷹ノ巣遺跡ガラス玉】



31 ふるさと考古学③「土器の考古学2」(講師・綿引逸雄氏)

8月

3-6 三反田新堀遺跡試験調査／6 ふるさと考古学④「土器の考古学3」(講師・鈴木素行)／7 ふるさと考古学⑤「骨の考古学」(講師・小宮孟氏)／18 片平雅俊氏(日立市企業局) 資料調査(大洗町吹上遺跡黄石・土器)

／18-24 博物館実習 茨城キリスト教大学



20 ふるさと考古学⑥「土器の考古学4」(講師・綿引逸雄氏)／23 茨城県立歴史館企画展「木の考古学」へ資料貸出(猪谷津遺跡木製品)／濱田篤信氏資料見学(三反田蜆塚貝塚土鍾・石鍾ほか)／31 三反田蜆塚遺跡本調査終了／24 佐倉市より資料返却／30 磯崎東古墳群試験調査開始



9月

4 ワンケースミュージアム21終了

／7 栃木県立博物館企画展「土偶の世界」へ資料貸出(三反田蜆塚貝塚ほか土偶)／8-14 日立市企業局「下水道フェア」へ資料貸出(大洗町吹上遺跡黄石ほか)／9 中根小学校出張授業(勾玉作り)



11 ワンケースミュージアム22「霞ヶ浦の製塩土器」―畑貝塚と道成寺貝塚―開始／21 埋文センター駐車場修復作業終了／24 磯崎東古墳群試験調査終了／29 県西地区担当者会議見学

入館者状況 (2011.4.1～2011.9.30)

月	開館 日数	個人		団体		計
		(人)	(団体)	(人)	(団体)	
4月	26	80	1 (1)	83 (83)		163
5月	26	186	1 (1)	69 (69)		255
6月	26	144	6 (5)	583 (568)		727
7月	27	220	9 (2)	384 (203)		604
8月	26	358	10 (0)	132 (0)		490
9月	26	149	4 (0)	25 (0)		174
合計	157	1137	31 (9)	1276 (923)		2413

() 内は学校数

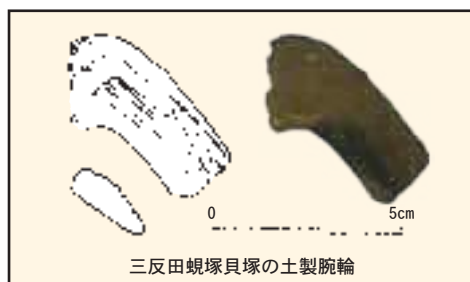
ひたちなか市埋蔵文化財調査センター及び(財)ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社が開催する事業は『ひたちなか市報』及び下記のホームページでお知らせいたします。
<http://business4.plala.or.jp/h-lcs/>

編集後記の 笑つ壺輪

「女子大生と装身具」シリーズ第二弾は、土製腕輪。これは、三反田蜆塚貝塚の貝層サンプルを水洗して、七月に検出された。今年の博物館実習生は女子が三名と聞いていたので、「ふるさと考古学」の土器づくりで腕輪の模造品を製作したり、篠山紀信が撮影したキャンディーズの写真を手本にしようと調べてみたり準備を進めた。

三人の構図はなかなか難しい。狭い空間の方が寄り添えるだろうと、撮影場所は第二休憩室とした。カメラマンに腕はないので、シャッターを押しまくって奇跡の一枚を待つしかないのだが、三人同時に奇跡が起きるのには、いつもの確率を三乗しなければならぬ。撮影した写真の中から表紙を選ぶ。トリミングしないと、どうにも落ち着が悪い。あくまで構図の問題であったことを強調しておきたい。

手本にしようとした写真のキャンディーズは、ラン・スー・ミキという個性の組み合わせ。ランとミキは、腕輪を楽に装着できそう。今更には、土製腕輪が破片であったことに感謝しなければならぬ。



ひたちなか埋文だより 第35号

編集 財団法人ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社

〒312-0011 茨城県ひたちなか市中根3499 Tel 029-276-8311 FAX 029-276-3699

印刷 株式会社 高野高速印刷

2011年10月31日発行

発行 ひたちなか市埋蔵文化財調査センター

表紙のモデルは鈴木愛さんです。